

もくじ

この本を読んでいただくみなさんへ 3

●資料・日本への大空襲 (主なもの)

1 大空襲、焼土化する日本 4

撃ちてし止まん 空襲の思い出/断じて勝つ

日記に残された空襲体験 3月10日(土 晴)/せんそう/日記

●コラム・東京と横浜への大空襲

東京大空襲——船渡和代さんの手記から

2 親元をはなれての学童疎開 22

学童疎開への出発 8月21日(月 晴)/45年1月21日

●ことば解説 学童疎開

学童疎開での生活 1944年9月13日(水 曇)/44年10月24日(火 晴)/44年11月1日(水 晴)/

家族への手紙/鈴木知明、芙美代兄妹への父鈴木武之助の手紙

ひもじさとの闘い <おかず日記>抄/乾燥イモを盗み食い

疎開から帰ったのは敗戦から7ヶ月後 1946年3月7日(木 曇・吹雪)/3月8日(木 晴)

3 「最後のひとりまで」と住民・学徒を巻き込んだ沖縄戦 36

沖縄、「対馬丸」の悲劇 忘れえぬ波間に叫ぶ姉の声

ひめゆり学徒隊の悲劇 ひめゆりの乙女たち

●コラム 沖縄戦/●ことば解説 ひめゆりの塔

餓死兵を何百も焼いた 高沢義人さんの証言

4 広島・長崎の悲劇を繰り返さない 48

広島・長崎に原爆投下 げんしばくだん/やけあとで/ぼくのあたま

『原爆の子』無題/無題/原子爆弾が落とされた日

映画「ひろしま」映画「ひろしま」を見て/広島

●コラム 核兵器禁止条約

おわりに 「死に損ない」と罵倒した中学生と人間的な感情 62

表紙 右 広島「ピースメッセージとろうろ流し」。8月6日夕方から平和を願って約1万の灯ろうが流される。(柿沼秀明撮影)

左 広島に原爆でできたキノコ雲。(米軍撮影)

裏表紙 長崎「平和の灯(ともしび)」。8月8日の夕方から平和を願った手作りろうそくがともされ、コンサートが開かれている。(柿沼秀明撮影)

この本を読んでいただくみなさんへ

アジア・太平洋戦争が、1945年にはいと、日本は、敗戦を重ね戦線の撤退を余儀なくされていきます。そして、本土決戦の意志をかためます。

アメリカ軍の爆撃機が日本全土を爆撃しはじめました。大規模な無差別爆撃が、大都市や工業地帯だけでなく、全国におよびました。「資料・日本への大空襲」をみると日本の多くの都市に爆撃があったことがわかります。

日本では、「本土決戦」、「一億玉砕」ということばが、呼びかけられました。「一億玉砕」とは、「天皇陛下のために最後の一人まで戦い抜く」ことです。

都市部から住民の疎開がはじまり、子どもたちの学童疎開が本格化していきました。親元から離れ、集団で疎開した子どもたちは、さびしさやひもじさをこらえ、それでも、必死で日本の勝利に協力しました。

沖縄でのアメリカ軍とのたたかいは熾烈を極めました。沖縄では、住民を軍隊に協力させ、女生徒たちも従軍看護婦として協力し、多くの犠牲を出しました。そして、8月には、広島と長崎に原爆が投下され、地獄絵がくり広げられたのです。

子どもたちは、大人と共に、最後の最後まで日本の勝利を信じて戦争を戦ったのです。この巻には、日本の国民が多大な被害を受けた45年の戦争体験を子どもたちの目とらえた作品を集めてみました。

●資料・日本への大空襲 (主なもの)

1944年	1945年
5月29日 横浜大空襲	7月16日-17日 平塚空襲
6月16日 米軍、中国大陸から北九州を初空襲	5月31日 台北大空襲
11月24日 米軍の新型爆撃機B29、マリアナ諸島より東京を初空襲。	6月19日-20日 静岡大空襲
	7月5日 第1次横手空襲
	7月7日 千葉空襲
	7月10日 仙台空襲
	7月12日 宇都宮空襲
	7月14日-15日 函館空襲
	7月14日 北海道空襲
	7月14日 釜石艦砲射撃
	7月15日 室蘭艦砲射撃
	7月15日 小樽空襲
	7月28日 米海軍、呉軍港爆撃
	7月28日 青森大空襲
	8月1日 富山大空襲(原爆投下を除く地方都市への空襲被害としては最大)
	8月6日 米軍、広島に史上初の原子爆弾を投下。
	8月8日 福山空襲
	8月9日 釜石艦砲射撃
	8月9日 米軍、長崎に原爆投下。
	8月10日 第2次横手空襲

東京大空襲—船渡和代さんの手記から

各地をおそった空襲のなかでも、3月9～10日の東京大空襲はもっとも激しいものでした。東京大空襲を体験した船渡（旧姓勝田）和代さんの手記「焼けた空」（当時12歳、手記を書いた年齢43歳）の一部を紹介しておきます。

薬局を営む勝田家は、10人家族でした。父万吉、母くに、祖母まき、長男晃一、二男稔、三男喜秋、長女和代、二女裕子、三女照子、四男隆久です。3月9日の夜は、偶然にも全員がそろっていました。

10時30分、警戒警報発令。父と兄たちは警防団や詰め所に出向きました。和代さんは、母と妹たちと共に店の床下に掘った防空壕に一度は避難したものの、外部の異様な雰囲気を感じ、国民学校裏の防空壕を目指しました。この時、母くにさんはまだ1歳にならない隆久ちゃんを背負い、和代さんは6歳の裕子さんと手をつないでいました。学校の前まで出たとき、和代さんたちは偶然にも、父や兄たちと出会ったのです。合流した一家は、たがいに声をかけ合い励まし合って、先の空襲での焼け跡がある砂町方面へと逃げることにしました。ごった返す人波にもまれ、襲ってくる火勢に追われながら、みなで手をつないで走りました。

以下は、船渡さんの体験手記です。

砂町に通じる進開橋にたどりついたとき、橋のてっぺんから母が烈風に足をすくわれ、ころころころがって、あっというまに煙の中に見えなくなりました。

「母さんッ、しっかりしろ！」

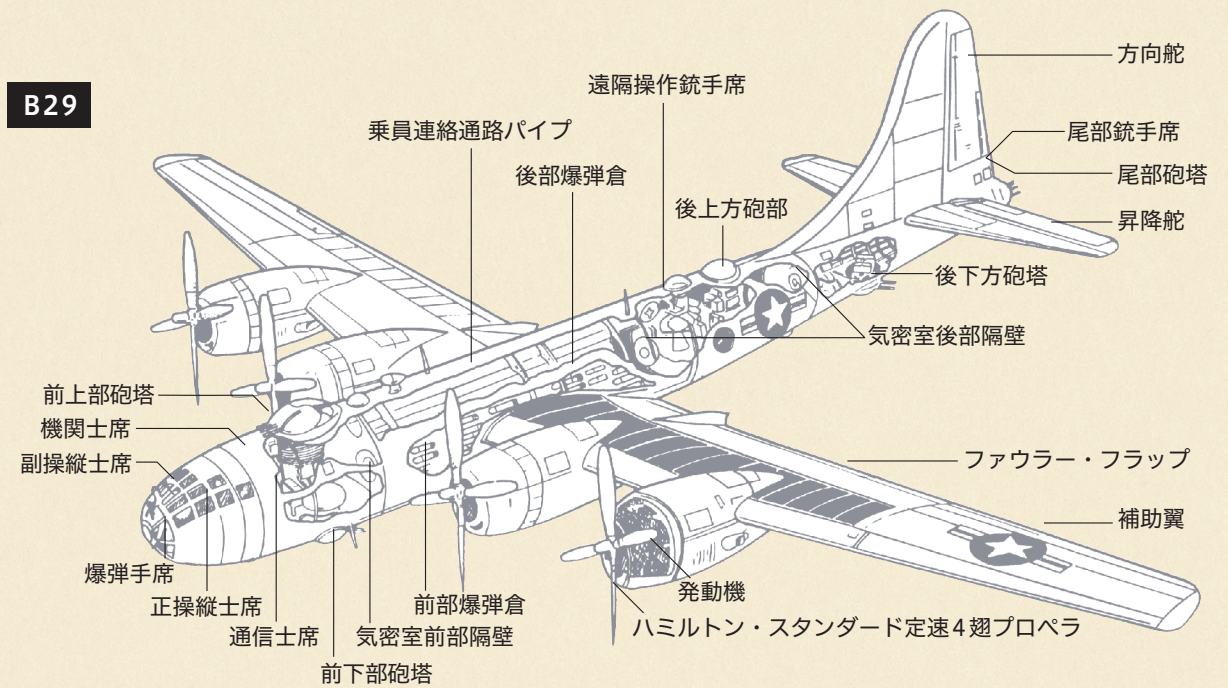
父がさけんで後を追ひ、同時に、喜秋兄さんも助けに走った。

隆久を背負った母が熱風に髪までさか立ち、「アーツ」とさけんだその声が、耳にこびりついて、わたしは稔兄さんにしがみついた。

ものすごい熱風が吹きまくり、熱くて熱くてもう逃げられない。わたしの家族は、この進開橋でとうとうバラバラになってしまった。

橋をわたりきった所の小さな植えこみに、残った4人がよりそった。右前方

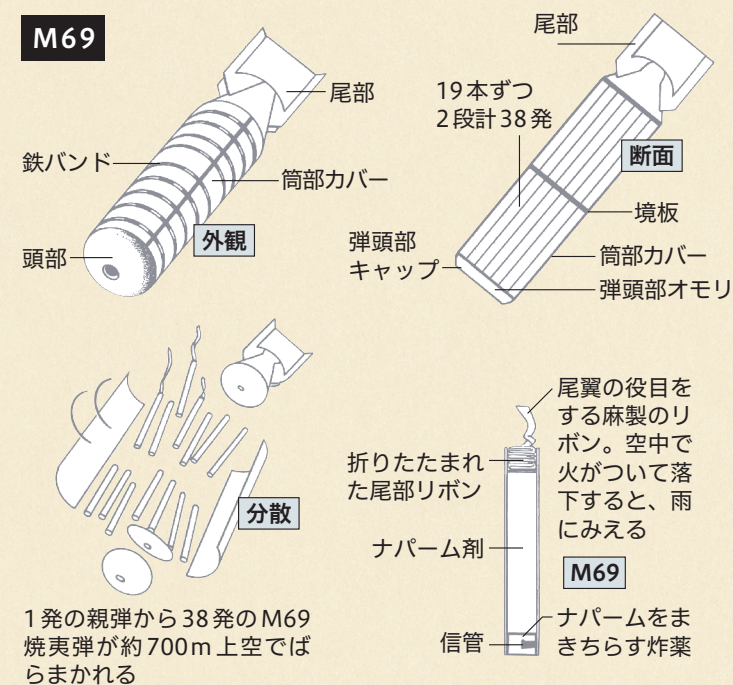
B29



図B29のしくみ。空気のうすい高い空も飛べるように、空気もれない気密室をそなえていた。

（図は東京空襲を記録する会編『東京大空襲の記録』をもとに作図）

M69



1発の親弾から38発のM69焼夷弾が約700m上空でばらまかれる

図M69焼夷弾のしくみ。直径8センチメートル、長さ50センチメートルの六角形の鉄の筒にナバーム剤をつめている。ナバームとは石油を作るときにできる「ナフサネート」とヤシからとる「パーム油」に、亜鉛、鉛、リン、ガソリンをまぜてゼリー状にしたもの。火が付くと燃え上がる。



東京上空で爆弾を落とすB29。

（米軍撮影）

学童疎開での生活

集団疎開した子どもたちはどのような日々を送ったのでしょうか。東京から疎開した子どもたちの日記から疎開地での生活がみえてきます。

1944年9月13日（水 曇）

五年 女子

午後はむさし野りようよう所へ体重をはかりに行った。私は、1kgへっていた。ふえた人は、山本さんと須田さんだけだった。終わってから、まき運びをした。今日のおやつはえだ豆だった。とてもおいしい、おいしい。夕食はおかずがついた。おかずはいかのにたのだった。おいしい、おいしい。帰りはいつもよりほがらかに話しあいながら帰った。

44年10月24日（火 晴）

五年 女子

朝とても寒かったので、畠の真中へおいすを持って行って日向ぼっこをした。とてもあたたかくてよい所だ。午後から、防空えん習をした。防空ごうの入る所をきめた。喜門先生は、「ここがみんなの死にばしょだ。ここをはかばだと思っていなさい。」とおっしゃった。私はなんだかへんな気がした。それから明日の体操大会のおけいこをした。女子は遊びをした。入る時と出る時のおけいこもした。明日はどうぞお天気になりますように。

44年11月1日（水 晴）

六年 女子

今日は午前中、分しようにたきぎをもらいに行った。かえって来ると残留組が来た。午後、道（前の方）をなおした。高いところをけずってひくいところにうめたりしていた。

休けいで日影にしゃがんでいたりとかすかに、サイレンが鳴っているのがきこえた。なり方は、クウシュウのようだ。へんだなあと思っていると、ジャンジャンと半しようが鳴り出したので急いで足を洗いかけると「クウシュウケイホウだ」と言われたので、はだしのままイスをもって防空ごうにとびこんだ。高等科が二人は行って全体で10人はいった。

やがてかえって行った。一、二年ももどって来て7名の一年生がは行って来て、少しきゅうくつだったが「クウシュウケイホウカイジョ」がすぐだったので、よかった。（ソノアトケイカイケイホウモカイジョデシタ）夜10時ごろ「ケイカイケイホウハツレイ」で服そうをした（*）。

（『600日の記録』）

*服そうをした：一度寝る準備をしていたが、警戒警報が発令したので、外に出られる服装に着替えたということ。

体重が「1kgへっていた」ことを気にしていますが、はじめの頃は、疎開地での食事はおいしかったようです。防空演習で「ここがみんなの死に場所だ」と言われたのはショックを受けたでしょう。11月1日の日記では午前中はたきぎもらいにいき、午後は道路の補修と1日勤労に時間を割いています。そして、疎開地でも空襲警報が発令される日々だったようです。



9月13日、体重測定
の絵日記。（「絵日記に
よる学童疎開600日の記
録」ホームページから。
平和祈念プロジェクト21
提供）

ひめゆり学徒隊の悲劇

アジア・太平洋戦争末期の1945年3月、沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の女子生徒及び職員総計240名（教師18名・生徒222名）によって、「ひめゆり学徒隊」が組織されました。戦局が絶望的になると、6月18日、学徒隊は解散を命じられました。彼女たちは献身的な働きをします。しかし、既に沖縄のほぼ全域をアメリカ軍が支配しており、また周辺も既に激しい砲撃にさらされていたため、地下壕から出ることはほとんど死を意味しました。ある者は放火の犠牲になり、またある者は、配られた手榴弾で「自決」の道を選びました。ひめゆり学徒隊240名中、死亡者は生徒123名、職員13名におよびました。

ひめゆりの乙女たち

静岡県中学 二年 後藤 涼子

第三外科壕では

ひめゆり学徒隊解散の軍命令を受けた
先生と学徒隊の女学生が
最後の解散会を楽しんでいた
ボロボロの服は
まだ平和だった頃の
女学生の服に着替えられて
みんな玄米と軍用乾パンをもらい
歌を歌った

翌朝

壕の脱出の機会を待つ女学生の前に
米兵が現れた
「デテコナイト バクダンヲ ナゲマス」
壕の中は異様な緊張感が漂い
女学生は息をひそめた

沖縄戦ではひめゆり学徒隊だけではなく、中学校、高校、女学校合せて21の学徒隊があった。

- ① 沖縄師範学校男子部(師範鉄血勤皇隊)
- ② 沖縄県立第一中学校(一中鉄血勤皇隊)
- ③ 沖縄県立第二中学校(二中鉄血勤皇隊)
- ④ 沖縄県立第三中学校(三中鉄血勤皇隊)
- ⑤ 沖縄県立農林学校(農林鉄血勤皇隊)
- ⑥ 沖縄県立水産学校(水産鉄血勤皇隊)
- ⑦ 沖縄県立工業高校(工業鉄血勤皇隊)
- ⑧ 那覇市立商工学校(商工鉄血勤皇隊)
- ⑨ 開南中学校(開南鉄血勤皇隊)
- ⑩ 沖縄師範学校女子部(ひめゆり学徒隊)
- ⑪ 沖縄県立第一高等女学校(ひめゆり学徒隊)
- ⑫ 沖縄県立第二高等女学校(白梅学徒隊)
- ⑬ 沖縄県立第三高等女学校(なごらん学徒隊)
- ⑭ 沖縄県立首里高等女学校(瑞泉学徒隊)
- ⑮ 積徳高等女学校(積徳学徒隊)
- ⑯ 昭和高等女学校(梯梧学徒隊)



●ひめゆり学徒隊の配置場所



(『ひめゆり平和祈念資料館ガイドブック』を参考に作成)